

は じ め に

この年報は1985年度に行った当研究所の事業・調査・研究活動の概要をまとめたものである。もともと研究所年報は単なる事業要覧ではすぐ屑籠行きになりかねないので、研究成果のわかり易い速報を中心にしようということからはじまった。1958年度を第1号として今回で29号目を迎え、その間に形もすっかり定着して、多くの方々に御支持頂いているものと信じている。ただ創刊以来表紙を飾ってきた当初の庁舎建築は、研究所が平城宮跡脇に移転したあと重要文化財に指定され、修理の手を加えて、来年度には奈良国立博物館の仏教美術センターとして活用されることになっているので、シンボルマークとしてはこれが最後になりそうである。

1985年度の活動も今まで以上に忙しく、また多方面にわたっている。飛鳥地域では飛鳥浄御原宮を求めて石神遺跡の発掘を続けているが、未だ核心をつかむには至らない。藤原京の左京六条三坊は今まで永くプレハブ暮しであった飛鳥・藤原宮跡発掘調査部の新庁舎を建設する予定地の事前調査で、京内では初めての大面積の発掘である。藤原京造営時の古墳改葬を証する朱雀大路跡の調査なども併せて、京内の条坊・宅地の状況が次第に明らかになりつつある。

平城宮では前年発見の大嘗宮遺跡が3時期の重なりをもつこと、第一次および第二次朝堂院の並立を物語る、両者を連結する柵塀が検出されたことなど、宮の構成に関する従来の知見に再検討を迫る新発見があった。また平城京内の坪の調査で32分の1町の宅地割がはじめて確認された成果も大きい。そのほか南都諸大寺の調査、町並・社寺など文化庁と協同しての調査が着実に進められている。

飛鳥資料館では開館10周年記念として「日本と韓国の塑像」展が開かれた。近年韓国との交流が人・物の両面で一層盛んになりつつあるが、飛鳥という特別な立地条件を生かしながらさらに深めてゆきたいものである。

埋蔵文化財センターが課題としている開発的研究では、年輪年代学が紀元前37年から現代まで2021年分に及ぶ暦年標準パターンを完成させたのがいささか自慢できよう。こんご文化財の年代判定の大きな武器となることが期待される。

近年の厳しい国家財政の中で、当研究所の人員・予算も困難な道を歩まざるを得ない状況におかれているが、所員一同懸命な努力を続けており、従来にも増して各方面の温かい御支援と御鞭撻をお願いする次第である。

1987年2月

奈良国立文化財研究所長

鈴木 嘉 吉